4. high risk 妊娠の予後に関する研究

①high risk 妊娠の予後に関する研究

分担研究者
京都大学医学部婦人科学産科学教室
西　村　敏　雄

共同研究者
京都大学医学部婦人科学産科学教室
富　永　敏　朗
近畿産科婦人科学会学術委員会
（委員長：西　村　敏　雄）
HRP研究部会
須　川　　　佶
望　月　真　人

研究目的

high risk妊娠における母児の予後に関する研究を行うにあたり，このための基礎的な研究として，近畿地区におけるhigh risk妊娠の実態を調査研究した。今回は，とくに最近注目されている甲状腺疾患合併妊娠に関する疫学的調査研究の結果がまとまったので報告する

研究方法

近畿産科婦人科学会学術委員会HRP（High Risk Pregnancy）研究部会により近畿地区の兵庫県，大阪府，京都府，奈良県，和歌山県における30主要病院における過去3年間（昭和49～51年）の甲状腺機能異常妊娠を実態調査した。

研究結果

調査期間の分娩総数は56,114例，うち甲状腺機能異常妊娠は157例で総分娩数の0.28％，甲状腺機能異常妊娠で分娩したものは118例で0.21％にあたる。（表1）

疾患別でみると，甲状腺機能亢進症が70.1％，非中毒性甲状腺腫が17.6％，甲状腺機能低下症が12.7％，甲状腺癌0.6％で　，甲状腺機能亢進症が最も多かった。（表2）

甲状腺疾患の発症の時期をみると，10才までが1.9％，11才～20才が16.6％，21才以後が70.1％，妊娠以後に発症したもの11.4％で，大半が20才以上で発症している。各疾患別に発症年令をみると，30才代の発症が全体の33％を占め，次いで20才代，40才代に多く，バセドウ病，甲状腺機能亢進症，中毒性甲状腺腫などが比較的若年に発症する傾向が認められた。

遺伝的にみて家族に甲状腺疾患を有するものは3.2％であった。

甲状腺機能異常妊婦の妊娠ならびに分娩経過をみると，流産が8.3％，早産が8.9％，死産が0.6％，妊娠中毒症合併が22.3％に認められる。正常妊娠の頻度は，流産7.7％，早産4.4％，妊娠中毒症合併10.7％であり，甲状腺機能異常妊婦では正常妊娠に比べて流早産や妊娠中毒症の発症頻度が高いことがわかった。（表3）

さらに甲状腺機能異常の発症の前と後における流産，人工妊娠中絶，早産，満期産の頻度を比べると，甲状腺機能亢進症の場合には，発症前には，流産29.4％，人工妊娠中絶16.9％，早産32.5％，満期症73.2％であるが，発症後には，流産70.6％，人工妊娠中絶83.1％，早産67.4％，満期産26.9％となり，発症後には流早産や人工妊娠中絶の頻度が高くなり，満期産の頻度は低下することがわかった。なおthyroid stormは1.3％の頻度で認められた。

分娩様式は，正常経膣分娩86.2％，帝王切開

分娩6.4％，吸引分娩7.3％であった。

新生児の生下時体重は，2,500ℊ以下が12.2％，2,501～3,500ℊが65.8％，3,501～4,000ℊが17％，4,001ℊ以上が4.9％であった。

生下時アプガースコアは，6以下が4.1％，7が4.1％，8以上が91.8％であった。

新生児の異常では，新生児甲状腺機能亢進症は0.8％にみられ，その他，精神薄弱児0.8％，停留睾丸0.8％，発育遅延1.6％であった。（表4）

妊娠・分娩・産褥によって甲状腺機能異常が増悪した頻度は平均7.1％であった。また疾患別では，甲状腺機能亢進症が4.2％，単純性甲状腺腫が20％，結節性甲状腺腫が18％であり，増悪は妊娠中よりも産褥時に著しく認められた。

なお，妊娠中の甲状腺機能異常妊婦の診断，治療については十分な調査がえられなかったが，妊婦の甲状腺機能検査法では，BMRが16.7％，テトラキットが13.7％，PBIが12.7％，トリオソルブが11.8％，レゾマット－T_3が9.8％，TSH－RIAが6.9％，T_3－RIAが4.9％，リヤキットが4.9％，ETRが3.9％，サイロイドテストが3.9％，マイクロゾームテストが3.9％，サイオパックT_3が2.9％，T_4－RIAが2.0％，その他が0.9％の頻度で用いられていることがわかった。

考　　察

今まであまり調査がなされていない甲状腺機能異常妊娠をhigh risk妊娠の一つとしてとりあげ，近畿地区の主要30病院について実施した調査の成績をまとめると以下の如くとなる。

1. 甲状腺機能異常妊娠の頻度は総分娩数比で0.28％とかなり高率である。

2. 疾患別では70％が甲状腺機能亢進症であった。

3. 発症時期は20才以上がほとんどで性成熟期に一致している。

4. 流早産，妊娠中毒症の発症頻度が正常妊娠よりもかなり高率であり，発症後には発症前に比べて，流早産，人工妊娠中絶の頻度が高まり満期産の頻度が低下することを認めた。

5. 妊娠前から甲状腺機能異常の既往のある婦人が多く，妊娠によって顕性化や増悪が起ることは少ないが，産褥に悪化することが多い。

6. 分娩は正常妊娠と比べてとくに異る点はなかった。

7. 新生児は，生下時体重が正常妊娠より小である傾向が認められたが仮死率に差はなく，また甲状腺機能異常その他の異常の頻度は正常妊娠と大差はなかった。

要　　約

high risk妊娠の一つとして甲状腺機能異常妊娠について近畿地区主要30病院の調査を行なった。甲状腺機能異常妊娠の頻度はかなりの率に及び，妊娠経過に悪影響を及ぼす一方，産褥に増悪する傾向があり，管理の一層の進歩・強化が望まれる。

本研究は，近畿産科婦人科学会学術委員会（委員長．西村敏雄教授）HRP研究部会（世話人　須川　佶教授，故山口竜二教授）ならびに近畿産科婦人科学会所属会員の協力によって行われ，とくに集計・整理については神戸大学望月真人助教授の労によるものである。

表 1

甲状腺機能異常妊娠

	頻度	分娩
近 畿	0.28%	0.21%
兵 庫	0.13	0.09
大 阪	0.38	0.32
京 都	0.39	0.26
奈 良	0.41	0.28
和歌山	0.26	0.26

表 2

甲状腺疾患の分類と頻度

甲状腺機能亢進症	70.1%
非中毒性甲状腺腫	17.6%
甲状腺機能低下症	12.7%
甲 状 腺 癌	0.6%

表 3

甲状腺機能異常妊婦の妊娠と分娩の経過

	流産	早産	死産	中毒症	Thyroid storm
近畿	8.3%	8.9%	0.6%	22.3%	1.3%
兵 庫	7.4	7.4	3.7	25.9	3.7
大 阪	7.8	7.8	0	17.6	0
京 都	4.3	10.6	0	27.7	2.1
奈 良	15.8	15.8	0	15.8	0
和歌山	15.4	0	0	23.1	0
通常の妊婦	7.7%	4.4%		10.7%	

表 4

新生児の異常

新生児甲状腺機能亢進症	0.8%
ダウン症候群	0
精神薄弱児	0.8%
停留睾丸	0.8%
発育遅延	1.6%
その他	3.4%

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

high risk 妊娠における母児の予後に関する研究を行うにあたり,このための基礎的な研究として,近畿地区における high risk 妊娠の実態を調査研究した。今回は,とくに最近注目されている甲状腺疾患合併妊娠に関する疫学的調査研究の結果がまとまったので報告する